

# 韓国の死霊信仰と鎮魂（「恨プリ」）文化 — イエスの鎮魂と「死後結婚」 —

ふるた とみたて

古田富建

「KAL事件2カップルが霊婚佳約（訳注：死後結婚）を決める」

遺族、独身男女の魂を弔いたい」

KAL機撃墜事件で北洋の大海原に消えていった四人の若い男女が、KAL側の仲介により霊婚佳約を結ぶことになった。七日ソウル運動場で合同慰霊祭終了後に霊婚佳約を結ぶことになったのは乗客金範天さん（二七）、客室乗務員趙亨心さん（二三）と副事務長金学允さん（三〇）、客室乗務員徐貞淑さん（二二）の二カップルである。

金範天さんカップルに両家で霊魂婚約式でもあげてやらないと若い魂が浮かばれないという話がでて

のは、KAL007便が追撃された事実が確実にあった先月の二日の事であった。金さんのお父さんである金黄福さんはKAL側に「結婚させてやり魂を慰めたい」と未婚の女性犠牲者の中で死後結婚を望む家族を探して欲しいと願いだした。：

（朝鮮日報一九八三年九月九日）

これは、韓国で最も多くの購読者を抱えている保守系の新聞朝鮮日報の三面記事だ。一九八三年にソ連領空圏内を通過したという理由から、ソ連軍に撃墜された大韓航空に乗っていた若い犠牲者に、死後結婚をさせるという内容である。韓国の死後結婚の数は、東アジアの中で

は台湾とともに一、二を争うほど多く、飛行機事故だけでなく、将来のある若者が不慮の事故で死んだりすると、死後結婚を行うことがよくある。若者の死は、特に強い怨恨の念を残すといわれており、死後結婚は彼らの鎮魂の一つなのである。

韓国の死者祭祀で一般化しているのは、儒教儀礼である「茶礼」だ。「茶礼」が行われる旧暦のお盆や旧正月の時期には、都市部の人口が一挙に地方に流れる。その一方で、怨恨を抱く死者の鎮魂は、韓国の基層文化といわれる民間信仰の「巫俗」でなされる事が多い。

本稿では、儒教と「巫俗」の関係を踏まえながら、韓国の伝統社会に見られる死霊信仰と鎮魂について紹介したい。民間信仰である「巫俗」は、民衆の様々な宗教的な要求に応えながら、外来宗教と時には習合し、時には外来宗教に影響を及ぼしながら存在してきた。近代に入ってから、欧米から伝えられた外来宗教であるキリスト教も、「巫俗」の習合の対象になっている。韓国キリスト教が「巫俗」的であるという指摘はこれまでも沢山されてきた。ここでは現代韓国の「キリスト教系新宗

教」の中に、死者の解怨の担い手たる「巫俗」の影響がどのような形で見られるのかも考察してみたい。また日本の宗教的伝統の中にも、怨恨の念を持つ死者を祀る「御霊信仰」や、古来から存在する祖霊信仰と仏教が習合した日本独特の先祖供養があり「死後結婚」の例もある。日韓の類似点や違いを整理するのも本稿の目指すところである。

## 1 伝統社会の祖先祭祀・死者供養

### （一）儒教の祖先祭祀

儒教化される前の朝鮮社会は、死者の崇りや死への恐怖が根強くみられる社会であった。朝鮮では一七世紀ごろまでは、下層階級の民衆は死体をがけや野原に遺棄していた。死者の崇りを恐れ、死ぬ直前に肉体を家の外に運び出して捨てたり、家屋ごと死者を見捨てる風習が長く続いた。死体を捨てる場所は街路や港川、林中など様々であった。李朝が儒礼を採用し制度化した後も、死体放棄の風俗は依然として止まず、一五〜一七世紀にかけては地方だけでなく都にも見られた。

一方、上流階級の死者儀礼は仏教式か「巫俗」式で行なわれていた。「巫俗」は朝鮮半島に広範囲に存在する降神・世襲のどちらをも含む宗教的職能者を中心とする民間信仰で、その宗教的職能者をムーダンと呼ぶ。死体は仏式に火葬するか、遺体を藁にくるんで山野に放置し、三年後に白骨化した死体を棺に収め土葬するという二重葬(草墳)が行なわれていた。二重葬の際には、墓場にムーダンが呼ばれ、野祭が行われた。返魂された霊は、依り代に付けられて自宅の神祠に納められたり、ムーダンが預かったりしていた。埋葬後の死者儀礼は、法事や寒食の墓参りが行なわれた。法事では、墓参り後に僧侶を呼んで供養し、寒食にはムーダンを墓場に呼んで招魂した<sup>(3)</sup>という。

今日の韓国は「儒教の国」と称され、美風としてあたかも自ら儒教が広まったかのごとくに理解されている。ところが実際には、儒官らによって、上は王から下は奴婢まで徹底的に儒礼を行わせることで、儒教を社会倫理として生活の隅々まで浸透させた「人為的な産物」であった<sup>(4)</sup>。朝鮮が体制教学として受け容れた儒教は「朱子

秋夕等の名節にこれらを一括して祀る「茶礼」とがあり、五代祖以上を対象に毎年、春秋に屋外で執り行われる「時祭」があった。どの祭祀も、男性が主宰し、女性は供物を作り供えるなど裏手にまわり、祭祀の参加を許されなかった。

「孝は百行の根本」と言われるように、儒教倫理での「孝」は、もつとも重要なフアクターである。子供は自らを生み養育してくれた親を尊敬し、孝を尽くさなければならぬ。儒教の死者祭祀は、基本的には生前の親への「追慕」および「孝」の延長線上にあり、老後の奉養と同様に、子たる者の親に対する義務と考えられている。祭祀の趣旨は、死者を招いて飲食を提供することにあり、その点も老後の奉養と変わらない。祭祀での拝礼は、生前の還暦祝いなどで父母にささげる拝礼や、元旦の歳拝や婚禮時の拝礼と同様の形式をとる<sup>(5)</sup>。

ところで儒教の祖先崇拜では、「祖先」として祀られる対象に厳格な制限がある。儒教祭祀では父と子の垂直関係を重視するため、若くして死んだ者、男子を持たなかった者は自らの「祀り手」を持つことができない。し

学」で、それ以外の宗教である仏教や民間信仰、その他の儒教学派である陽明学などを排斥し、僧侶やムーダンは賤民とされ僧侶は都から追放された。現在韓国で名刹と呼ばれる寺が地方の山林に集中しているのは、朝鮮時代の大弾圧の名残である。儒教の徹底ぶりは、本家本元の中国よりもそれは厳しいものであった。

死者儀礼においても当然儒教化が進み、仏教的・民俗的な埋葬は、弾圧の対象になっていった。一七世紀には儒教式の埋葬をして喪に服す形式が定着し、葬儀だけでなく冠婚葬祭全てが朱子学化されていった。冠婚葬祭では「朱子家礼」をもとに朝鮮で編纂され民間に流布した『四礼便覧』が手引書になっていた。喪に服す期間は三年間(満二年)であり、「大祥(三回忌)」の儀礼が終わると、死者はあの世へ行くと考えられている。そのため「大祥」までが喪中であり、それ以降の儀礼は祭祀となる。

『四礼便覧』の規定によれば、祭祀には四代奉祀の原則によって、父母、祖父母、曾祖父母の四代までを対象にそれぞれの忌日に屋内で行なう「忌祭祀」と、正月やたがって子が親に先立って死ぬことは、親への「孝」を欠くことになる。また親にとっては祭祀の「祀り手」を失うばかりか、自分の死後に祭祀ができなくなることから先祖への「孝」を欠くことになり、非常に不本意な結果を残す事になる。このような文化背景から、韓国では未婚者は一人前とみなされない。また朱子学では霊的存在や超自然的存在を認めない。そこで儒教の教化と合理化が進むにつれ、祭祀の場からは霊的な性格や影響力が徐々に否定されていき、「儒教の場」では怨恨を抱く先祖や死者の供養は考慮されなくなっていく。では、「祖先」となれず若くして死んだ者や、子を持たない者、怨恨を抱いている死者への供養はどのように行われたのかを、次章で説明する。

### (2) 「巫俗」の死者供養

儒教では、独身で死んだ者はささやかな葬式ですませ、その後の祭祀も略式にするか行わないのが通例である。また不運で悲惨な死に方をした場合、祭祀を執り行わないばかりか「鬼神」「冤魂」の名で恐れ遠ざけようと